

謹んで言上する内容の覚え書き

一、奈良の東大寺は聖武天皇によって建立された。寺のなかの正藏院と呼ばれる倉（現在の正倉院）に、蘭奢待と紅沈（紅塵とも、全浅香の雅号）の二種の名香がある。この倉は勅封（天皇によって封じられる）であるので、寺が勝手に開くことはできない。それについて、先例も、足利の代々の将軍が天皇への奏上を経て、勅使の出自を得て倉を開き、これらの名香を手に入れようとしたとことが、古い書物におよそ記されている。

一、織田信長がこの名香を手に入れようと天皇に奏上したところ、勅使として日野輝資・飛鳥井雅教が出向き、天正二年（一五七四）三月二八日に倉が開けられた。この時の切り取りの奉行（政務担当者）は、佐久間信盛・菅屋長頼・塙（原田）直政・武井夕庵・松井友閑・中坊盛祐である。旧式にのっとり、約五センチメートルを切り取ったとことが、古い書物に記されている。

一、徳川家康の時代、慶長七年（一六〇二）六月一日、勅使として烏丸光広が出向き、倉を開いて修理をおこなった。この奉行は本多正純と大久保長安、東大寺の長老は学光であった。その際、家康が名香の入手を望んだとことが、古い書物におおよそ記されている。この時、倉の前に勅使の宿所を建てる差配役、ならびに勅使の世話役に、中坊秀祐が任命された。

右の通りである。蘭奢待と紅沈の二種の名香を将軍に差し上げたいと我々みな願っている。このことを早く申し上げたく思っていたが、将軍に対し恐れ多いことなので今まで差し控えていた。この倉はもう長い間開かれていないので、雨漏りやほこりなどによる汚損がないか不安を抱いている。名香を取り出すついでに、倉の内部の掃除などもおこないたいと考えている。詳しくは口頭で述べる。以上。